

鹿児島県における触れ合い遊びを通した子育て支援から見える課題

The Problems of Child Care Support which Appeared through Physical Contact Play
in Kagoshima Prefecture

丸田愛子・中村礼香
Aiko Maruta, Ayaka Nakamura

鹿児島女子短期大学

抄録：本研究は、今後の地域に貢献できる子育て支援のあり方について考察することを目的としている。鹿児島市の主な子育て支援施設で実施されている子育て支援講座の調査・分類と子育て家庭への講座内容のニーズ調査の比較では、触れ合い遊びの実施とニーズが最も高い結果となった。触れ合い遊びの実践では、場面を捉えることで子と親が互いに配慮し合いながら能動的にかかわり合っていることが分かった。触れ合い遊びは、親と子のかかわりの双方向性が生まれやすい活動であり、親子を支援する活動としての可能性が示された。

Key words：子育て支援講座の現状と保護者のニーズ、触れ合い遊び

1. はじめに

本研究は、継続研究の第2報である。平成26年度¹⁾に丸田と中村は子育て支援に関する先行研究を行った上で、音楽遊びを通した子育て支援講座受講者の保護者を中心に質問紙調査を行い、保護者の子育て支援に対するニーズ調査を行った。その結果、1位として「触れ合い遊び」、2位「季節に関するイベント」、3位「運動遊び」に次いで4位に「音楽遊び」が挙げられた。中村が行った音楽遊びはほとんどがリトミックを中心とした身体運動であり、親子でコミュニケーションを取りながら行う音楽活動であったため、触れ合い遊び、運動遊びも活動の一貫に入っていたことと、音楽遊びを経験させたい保護者が講座を受講されたことからこのような結果になったことも考えられる。そこで、その後の課題として、他の分野の子育て支援講座受講者や、乳幼児の保護者に質問紙調査を行い、鹿児島における地域に根ざした子育て支援のあり方について理解を深め、子育て支援の質の向上に繋がればと考えた。

本研究では、まず、鹿児島市の子育て支援センターや保育所が運営する子育て支援組織が主催する子育て支援講座の平成27年1月から12月までの1年分の講座内容を分類し、どのような内容が実践されているのかを把握する。続いて、前回の質問紙調査において最もニーズの高かった触れ合い遊びに関する子育て支援講座を丸田が実践し、活動内容に関するアンケート調査を行う。その上で、鹿児島の乳幼児

の保護者に行った質問紙調査から、子育て支援講座へのニーズを整理し理解することで、今後の地域に貢献できる子育て支援講座のあり方について考察することを目的とする。

2. 鹿児島市の子育て支援

(1) 鹿児島市の子育て支援施設の現状と今後について

鹿児島市には、子育て支援施設が約20カ所設置されている。市が運営しているもの、保育所が運営しているものがある一方で、児童センターや助産師会など、様々な機関で子育て支援を行っている。すこやか子育て交流館管理運営等事業の対象者は小学三年生以下の子どもとその家族、親子のつどいの広場運営事業の対象者は小学校未就学児とその家族、児童センター運営事業は児童（満18歳未満の子ども）・子ども会・母親クラブ等を支援しており、そして地域子育て支援センター事業の対象者は小学校未就学児とその家族となっている。また、鹿児島市内の育児サークルも入手したデータだけでは30カ所程行われており、親子の遊びや障がい児の保護者のサポート、母親だけのヨガなど保護者の息抜きや悩み相談、また親子で楽しめるサークルが多数開催されている。

平成27年3月に発表された「鹿児島県子ども・子育て支援事業支援計画」²⁾によると、施策の一つに「地域子ども・子育て支援事業等に従事する者の確保と資質の向上に対す

る支援」という項目が設けられている。小規模保育、家庭的保育、ファミリー・サポート・センター、放課後児童クラブ、地域子育て支援拠点事業等が新たに子ども・子育て支援法に基づく給付・事業となることで、今後子育て支援施設が増えていくものと思われる。

具体的には、鹿児島市は平成27年3月に発表した「鹿児島市子ども・子育て支援事業計画」³⁾において、平成25年度の子育て支援施設の利用者数実績を基に平成31年度の見込み数を目標値として支援センターの整備を進める計画を立てている。平成25年度は約31万人が支援センターを利用したが、26年度は約41万人の利用予定者があり、31年度には約54万人が予想されている。それに伴い、平成28年度供用開始予定で伊敷地域に新たに親子つどいの広場を建設予定である。そして段階的に地域子育て支援センターの整備を進める予定で、平成31年度にはほぼ利用予定者数と同数の設備を確保できると考えられている。

(2) 鹿児島市内の子育て支援講座の現状について

今回、筆者は13カ所の保育所で行われている子育て支援事業、4カ所の子育て支援施設での講座の資料を、集計・分類し、どのような内容がよく行われているのかの分析を行った。

分類としては、昨年度の丸田の質問紙調査の回答項目に合わせ、「1. 季節に関するイベント」「2. 子育て情報の提供」「3. 他の参加者との座談会」「4. 触れ合い遊び」「5. 集団遊び」「6. 自由遊び(遊び場提供)」「7. 運動遊び」「8. 音楽遊び」「9. 造形遊び」「10. 絵本の読み聞かせ」「11. 食育活動」「12. 子どもへの関わり方」「13. 生活面(トイレ、食事、睡眠等)の援助の仕方」「14. 個別発達相談」「15. 子どもの健康」「16. 専門家による講演」「17. その他」とした。

分類する内容は、保育所などの園庭開放や、子育て支援センターなどにおける自由遊びを除く、企画された子育て支援講座のみに限っている。そのため、丸田が示している「6. 自由遊び(遊び場提供)」の数値はゼロになっているが、毎日どこかの施設で遊び場が提供されており、それに関しては保護者が積極的に連れて行くことができれば、ニーズに合致することができる。

筆者が収集したデータだけで、鹿児島市内で1年間に開催される子育て講座は1340件であった。1ヶ月に110件以上は行われていることになる。ほとんどが参加費無料であり、費用がかかったとしても材料費数百円のみで参加することができる。子育て家庭にとってはとても心強い制度である。

後に図1で示すが、1位となったものは「4. 触れ合い遊び」であった。これは丸田の昨年の調査と合致する。その触れ合い遊びの中には、中村の判断で分類しているものも多い。例えば、「パパとの触れ合い遊び」という名前で行われている講座の内容が製作活動や外での運動遊びであったりするが、これらをそれぞれの「9. 造形遊び」「7. 運動遊び」に分類するのではなく、講座の名称を重要視し、「4. 触れ合い遊び」と分類した。同じように「祖父母との触れ合い遊び」なども触れ合い遊びに換算している。これは、父親との触れ合いを大切にしている講座であって、造形遊びや運動遊びはその手段となっていると判断したからである。2位として上がってきたものは「14. 個別発達相談」であった。これは保護者としても一番気になるものであろう。例えば言語聴覚士、臨床心理士、児童発達相談など、定期的に毎週行われているものが多く、保護者が子どもの発達について気になることがあれば相談できるような環境が整っていることが分かる。3位は「2. 子育て情報の提供」である。例えば、パパママ講座、ピアサロン等などがある。特に、双子や三つ子などの保護者が集まる場の設定、一人親家庭や障がい児を持つ親が集まる場、外国籍の子どもと保護者が集まる場など、同じような悩みを抱えやすい保護者の交流の場を設け、お互いに情報を交換しやすい場を提供し、子育て情報について共有することができるようになっている。無論、子育てに不安を持つ保護者全てが参加することができる場も多く設けられており、様々な子育てに関する情報を得る場としてこのような子育て支援施設を利用していることが分かる。「1. 季節に関するイベント」はやはり丸田の昨年のニーズ調査の結果と類似しており、4位という高い結果となっている。このことから子育て世代の保護者のニーズと子育て支援センターの講座内容が一致していることが見て取れる。

一方、「8. 音楽遊び」についてである。昨年中村がリトミックをメインとして、手作り楽器遊びや、手遊び指遊び、フルートの生演奏などの音楽遊びを通した子育て支援活動を行った際の質問紙調査で「音楽を通した子育て支援にどのようなことを求めますか」という質問を行った。その結果として、1位「リトミックの様な身体活動を通した音楽遊びがしたい」95名(78.4%)、2位「生演奏を聴かせる機会がほしい」66名(52.0%)、3位「子どもと一緒に歌う機会がほしい」40名(31.5%)、4位「子どものための歌をたくさん知りたい」37名(29.1%)という結果が出た。そのため、筆者にはリトミックの様な身体活動を伴う活動が好まれるのではないかと考えていたが、子育て支援施設での

音楽活動の詳細を見てみると、わらべ唄遊びが最も多かった。他にはクリスマス前のハンドベル演奏会などの生演奏や、ミュージカル鑑賞、場所によっては月に一回ほどリトミックが行われているところがあった。わらべ唄がこのように多くの施設で行われていることを予想していなかったため、今後個人的にわらべ唄のニーズについても調査していく必要性を感じた。確かに現在の学生たちは「わらべ唄」がどのようなものか知らない。子どもの頃に遊んだはずの「花いちもんめ」などの歌詞もほとんど覚えていない。わらべ唄は日本の伝統的な子どもの歌であり、コミュニケーションを取るにはとても良いものである。もしかしたら現代の乳幼児の保護者世代はわらべ唄で遊んだ記憶があまりないのかもしれない。わらべ唄を今後の世代に受け継いでいくためにも、リトミックだけではなく、わらべ唄も筆者自身が学生たちへの授業や子育て支援講座に積極的に取り入れていく必要があるのではないかと考えさせられた結果であった。

「16. 専門家による講演」は「14. 個別発達相談」の中身と重なるものがあるかもしれないが、多人数を対象として保護者がほぼ一方的に専門家の話を聞くものをこれに分類した。内容として歯科講座、緊急時対応講座、安全講座、足の発達に関する講座、保健師・助産師講座、看護師・薬剤師講座など多岐に渡る。その中の講演にはおそらく「12. 子どもへの関わり方」「13. 生活面（トイレ、食事、睡眠等）

の援助の仕方」「15. 子どもの健康」も含まれているであろうが、内容が詳細に把握することができず、筆者が分類することができなかったために、すべてを「16. 専門家による講演」に分類し、上の3つの項目は集計数をゼロで示している。このように様々な専門家の話を一つの施設で聞くことができるのであれば、保護者は諸所の機関に出向くことなく、よく利用する子育て支援施設で様々な講演を聞くことができ、勉強することができる。子育てをする上での安心感を高めることができるだろう。

詳細には述べないが、もちろん「10. 絵本の読み聞かせ」や、お店屋さんごっこなどの「5. 集団遊び」、「9. 造形遊び」、「7. 運動遊び」など多くの活動が行われている。また場所によっては英語に触れ合う時間も取られていたり、おもちゃを治すおもちゃ病院という時間が取られていることもある。このように、子育て支援に関する内容は多岐に渡る。

また、子育て支援講座としての内容として相応しいのか筆者には判断することができないのであるが、親のリラックスのためのヨガや、マッサージ、ストレッチ、アロマ講座なども年間で40回近く行われていた。子育ては楽しいだけでなくストレスがたまることも多いであろう。それを癒やすことも子育て支援に入るのかは今後また検証が必要だとは思うが、講座の一つとして行われていたため、「17. その他」に含めることにする。

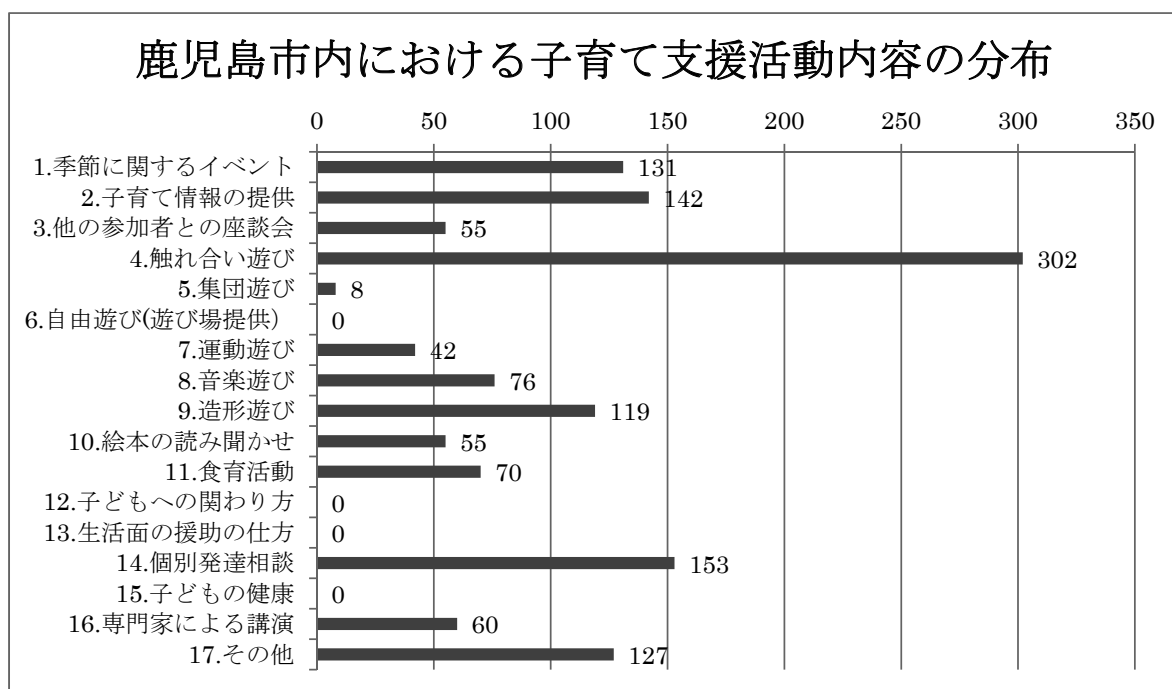


図1 鹿児島市内における子育て支援活動内容の分布

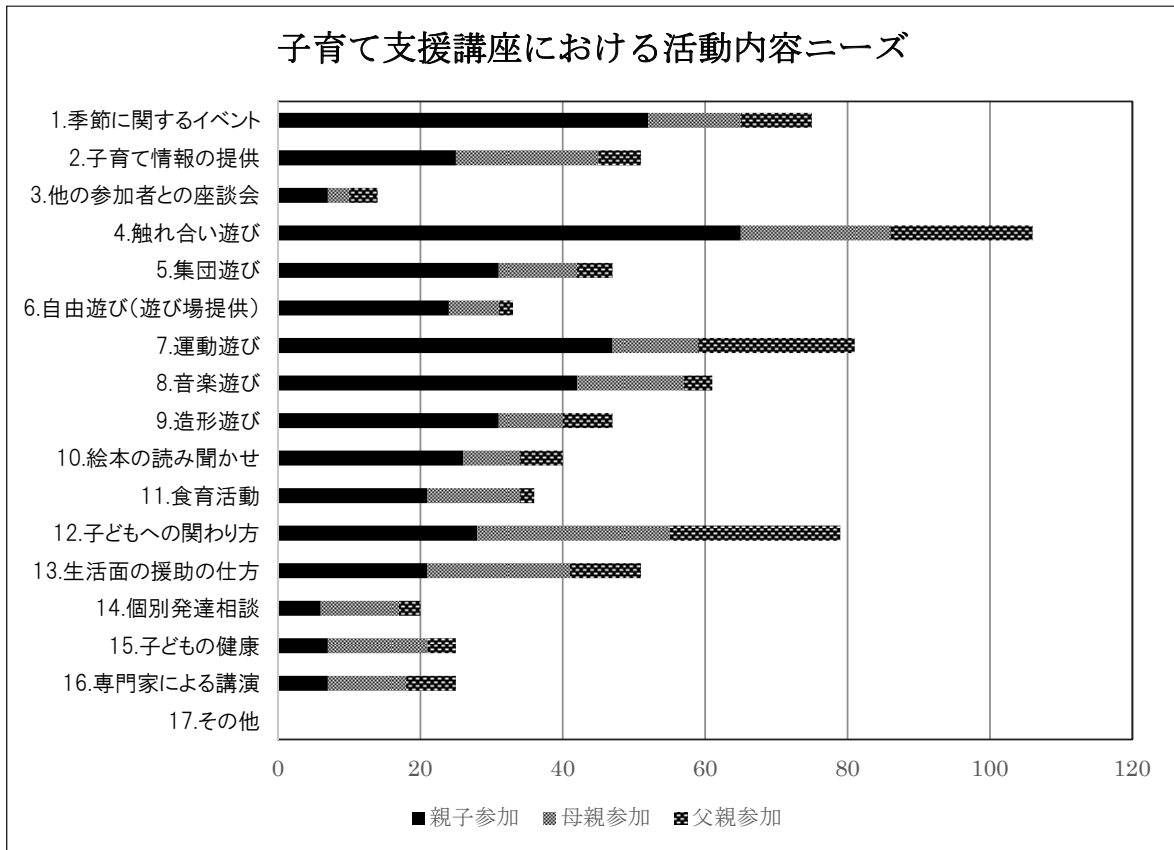


図2 子育て支援講座における活動内容ニーズ

子育てに関する情報は、大抵のことが子育て支援施設で得ることができることがわかった。これらの施設を有効に利用することができれば、子育てに関する不安は、かなり取り除かれるであろう。では、実際の子育て支援家庭の保護者のニーズがどうなっているのかを次の章から見ていきたい。

3. 子育て支援講座におけるニーズ把握

本稿の第1報「鹿児島県における音楽を通じた子育て支援からみえる課題」において、平成26年4月から12月に鹿児島県内で実施した子育て支援講座に参加した保護者対象に質問紙調査を実施し、結果を報告した。今回は、更に平成27年1月から平成28年1月までの間に子育て家庭の保護者対象に調査を進めたものを合わせて報告する。

3-1 研究方法

鹿児島県内の子育て家庭の保護者を対象に、質問紙を配布し、回答を得た。(195名中159名回収率81.5%) 質問項目は、第1報と同様に複数回答法とした。また倫理的配慮として、調査用紙に研究の目的を伝え了解を得、実施された。

3-2 調査内容

子育て支援講座における講座内容のニーズ把握にあたり、

問いは本稿の第1報と同様とし、「これからの子育て支援では、どのような活動が必要だと思われますか。」と設定した。回答にあたっては、受講者の対象として、親子参加、母親参加、父親参加の選択肢及びそれぞれ希望する活動内容を選択する設定とした。活動内容の選択肢については、第1報¹⁾を参照することとする。

3-3 結果と考察

結果は図2の通りとなった。受講者の対象については、親子参加が多く選択され(55.6%) 続いて、母親参加(27.1%)、父親参加(17.1%)の順に選択された。活動内容については、1~16項目から選択され、「17. その他」は0%であった。活動内容については、「4. 触れ合い遊び」(66.7%)が最も多く選択された。続いて「7. 運動遊び」(51.0%)、「12. 子どもへの関わり方」(49.7%)、「1. 季節に関するイベント」(47.1%)であった。これらは本稿の第1報での調査結果となった「4. 触れ合い遊び」(50.5%)、「1. 季節に関するイベント」(37.8%)、「7. 運動遊び」(30.5%)と相似した結果となった。

3-4 子育て支援活動内容の分布とニーズ把握の比較

鹿児島市で実施されている子育て支援活動調査とニーズ

調査を比較する。どちらの結果においても、他項目と差をつけて「4. 触れ合い遊び」が最も多く選択された。このことから、現在実施されている講座とニーズが合致していることが分かる。一方、「7. 運動遊び」はニーズが高いものの、実施されている講座が少ないことが分かった。同じく「12. 子どもへの関わり方」もニーズは高いが、該当講座がないことがない。「1. 季節に関するイベント」は、実施されている講座とニーズが合っていることが分かった。

これらの結果より、以下考察をする。「4. 触れ合い遊び」については、子育て支援の一つとして支援者及び参加者のどちらにも注目されていることが分かった。触れ合い遊びを通した子育て支援については、4章で詳細に捉えることとする。「7. 運動遊び」については、ニーズが高いことから、今後期待される内容であることが分かった。近年、乳幼児の運動機能の発達がやや遅くなっていることや運動発達への意識の高まりによるものと考えられるが、家庭での実施が難しくまた支援者にとっても活動構成が難しいことが講座数の少なさに繋がっていると考えられる。「12. 子どもへの関わり方」については、該当講座がないという結果になったが、これについては今後検証が必要であると思われる。「1. 季節に関するイベント」は、実施されている講座とニーズが上位の同順位であった。このことより、季節に関するイベントは子育て支援として欠くことができない内容であることが考えられる。

4. 子育て支援講座「触れ合い遊び」

(1) 触れ合い遊びについて

「触れ合い」とは、人と人が直接触れ合う身体のコミュニケーションの一つである。見つめたり、さすったり、抱きしめたり、声をかけたり、既に日常の中で実践していることが多くある。触れ合いを通して、安心や人とかかわる心地良さを感じることができる。この気持ちが自分への信頼となり、他者への信頼となる。また、触れ合いで反応する度に、気づき、応答、身体活動といった基本的な能力の発達が促される。このように、触れ合うことは自分を形作る上で欠かせないものである。子どもは、触れ合いで得た大人との信頼関係を基に他者に関心を寄せ、かかわりを持つようになる。

併せて、保育所及び幼稚園の指針及び要領から、触れ合い遊びについて考える。平成20年厚生労働省²⁾告示保育所保育指針(第3章保育の内容1 保育のねらい及び内容(2) 教育に関わるねらいおよび内容)及び文部科学省³⁾告示幼稚園教育要領(第2章ねらい及び内容)では、「ア健康 健

康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。イ人間関係 他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。ウ環境

周囲の様々な環境に好奇心や探究心を持って関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。エ言葉 経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。オ表現 感じたこと考えたことを自分なりに表現することを通して、「豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と書かれている。今回の触れ合い遊びは、乳幼児の興味関心をもとに、身体遊び・人との関わり・表現といった活動内容で構成されており、教育に関わるねらいとして示されている内容を包含していると考えられる。

今回はこれら「触れ合い」によって育つものを踏まえ、親子が直接触れ合いながら感覚を共有できるような遊びを「触れ合い遊び」とし、その実際を明らかにすることとする。

(2) 子育て支援講座「触れ合い遊び」の概要

実施日：平成27年9月

実施場所：鹿児島県A市

時間：15：00～16：00（1時間）

参加者：乳児から小学生の子どもとその親（子ども39名、親33名、見学10名）

テーマ：子どもの育ちを支える触れ合い遊び

プログラム：1, 身体遊び『さんぽ』：‘さんぽ’の曲に合わせて親子で手をつないで散歩をしたり、一緒に跳ねたりする。2, はじまりの言葉：本日の内容紹介。3, 歌遊び『はじまるよ』：実践者の歌と動きに合わせて、親子で真似る。4, 身体遊び『いっぽんばしこちょこちょ』：親子で向かい合って手あそびをする。『メンメンスー』：親子で向かい合って座り手や顔を触れ合う。『おふねがぎっちらこ』：子どもが親の膝に座り、筆者の歌に合わせて、揺れやリズムを体感する。『バスにのって』：子どもが親の膝に座り、CDの音楽に合わせて揺れやリズムを体感する。5, 休憩 6, 歌遊び『5つのメロンパン』：代表の子どもが前に出て、歌と製作物のメロンパンを基に、簡単な表現劇を経験する。7, 身体遊び『わにさんぽっくん』：親子で呼吸を合わせて、ジャンプする。『ロボット歩き』と『木登り上手』：子どもが親の身体を使って遊ぶ。8, 歌遊び『十五夜さんのもちつき』：親子で息を合わせて、季節を感じながら少し難しい遊びを経験する。9, 歌遊び『だるまさん』：親子で向かい合って座り、互いの表情の面白さを感じる。10, 表現遊び及び絵本の読み聞かせ『だるまさんが』：親の膝に子どもが

座り、お話に合わせて親子で揺れながら読み聞かせを聞く。

11. 布遊び『さよならバイバイ』: 一人ひとりが布を持ち、振りながら多くの人とさようならをする。

(3) 子育て支援講座「触れ合い遊び」の実際

活動の重点として、基本的には、親子で十分に触れ合うことを考えた。

1) 乳幼児の特性と活動内容

活動内容を考える上で、対象となる乳幼児の発達特性は重要である。今回は、対象児が0歳児から小学生となったため、構成が難しく感じた。考えた末、プログラムの中にそれぞれの年齢向けの内容を1つずつ組み込んで構成した。しかし実際に実施したところ、いずれのプログラムにおいても親子に戸惑いは見られず、むしろ親はプログラムに応じて、子どもが楽しめる方法を考えながら取り組んでいるようであった。このことより、親がプログラムへの参加の仕方を工夫していることが分かった。親子の触れ合い遊びは、活動内容を広く設定できる柔軟な活動であることが分かった。

2) 安心できる状況

＜場面1＞始まりの時間になり私は前に立つ。音楽をかけると、それまで休憩していた親子がその様子に気づき、活動の場に移動を始める。親子で手をとり、嬉しさに満ちた表情であった。その様子を見て、当初始まりの挨拶をする予定を変更し、プログラム1の『さんぽ』をすることにした。私が音楽に合わせて簡単な手本を示すと、真似て楽しむ姿が見られた。1曲分終え、終わりの合図をした時には、笑顔で向かい合う親子の姿がたくさんあった。その後親子は大きな輪になってその場に座った。

親子の様子から取り組みやすさを考慮し、さんぽをすることからはじめた。子どもは状況に敏感であり、特に乳幼児の場合は緊張してしまうと意欲が低下してしまう。初めて出会う場所や人の状況下では、安心できることがとても重要なことである。安心感が輪になって座ることとして現れ、結果活動に一体感がうまれた。

3) 親子のやりとり

＜場面3＞『おふねがぎっちらこ』や『バスにのって』では、子どもが親の膝に座り、私がうたう歌やCDに合わせて、親が揺れやリズムの強弱や速度をつけることで、子ども達はそれを体感した。揺れが起こる度に子ども達は大きな声をあげて喜ぶ。その様子を見て親は、更に揺れを大きくし、子どもの反応を楽しむ。

親子遊びでは親から子へのかかわりが考えられ、子の経験を期待していたが、子から親へかかわることによって、親にとっての経験となり得ることが分かった。

4) 遊びの展開

＜場面2＞『いっぽんばしこちょこちょ』とは、親子で向かい合って子どもが親に手を差し出し、歌に合わせて遊ぶものである。また『メンメンスー』とは、親子で向かい合って座り歌に合わせて、目や鼻など顔のパーツに触れる遊びである。普段互いの手や顔をじっくりと見る機会は少ないのか、喜んで楽しむ姿が見られた。特に、子どもが親の顔を触る時の子どもの期待感のある表情と子どもに顔を触られた時の親の嬉しそうな表情が印象的であった。

単純な遊びの後だったため、動的な遊びにも抵抗なく進むことが出来た。この遊びは、親の遊び方によって遊びの展開が決まる。子どもの反応をみながら、遊び方を工夫していることが分かった。

5) モデルをみる

＜場面4＞希望者の中から代表の子どもを決め、歌と製作物のメロンパンをもとに『5つのメロンパン』の遊びを行った。私が名前を呼んだら返事をして前に出る。照れながらも嬉しそうにやってくる様子を他のみんなも見守った。私と簡単なやりとりをし、メロンパンを受け取って、親のもとに戻る。

子育て講座は一斉の活動になりがちであるため、個々に関わることのできる遊びとしてこの遊びを構成した。やりとりがあるのは代表の子のみであるので、他の子ども達の反応が心配であったが、まるで自分のことのように反応を楽しみながら見ていた。他者の触れ合いの場面を見ることも、触れ合い遊びの一つのあり方と言える。

6) 遊びの発展

＜場面5＞『わにさんぱっくん』・『ロボット歩き』・『木登り上手』では、親子で呼吸を合わせることで、子どもが親の身体を使って遊ぶことをした。親子は身体で思い切り関わり合い、楽しさを共有していた。中には、親の肩まで登った子どもも見られた。この遊びは成功と失敗が分かりやすいが、子どもも親も粘り強く取り組んでいた。

楽しみながら身体能力を高めること、呼吸を合わせてリズムを感じて楽しむこととした。一つの目標に向かう取り組みが、達成感を得ることにつながった。

7) 実践者のあり方

活動中は進行役となり、説明、助言、励ましなど行った。親子の反応をみながら進めたが、それぞれの親子のやりとりを全体に示したり、提案したりすることが出来なかった。これは、筆者が活動を進めていくことに気持ちが向いていたことによるものであると反省している。個々の親子のやりとりの中から遊びの変化を見出し、再度全体に提示していく応答的な活動のあり方が今後の課題である。

5. 質問紙調査

5-1 内容

講座の満足度と改善点を把握するため、講座内容への関

心と受講後の感想について質問した。

- 1) 触れ合い遊びについて興味がありますか
- 2) 本日、触れ合い遊びを体験していただきましたが、いかがでしたか？

また、活動内容を構成するにあたって、受講者の要望が分からなかったためねらいの設定に苦慮したことを踏まえ、触れ合い遊びの具体的な需要を把握することとした。視点として、心身の発達を促す触れ合い遊び、手軽にできる触れ合い遊び、集団触れ合い遊び、人との関わりを促す触れ合い遊びを設定した。

- 3) 触れ合い遊びを通した子育て支援として、求める活動内容を一つお選び下さい。

- ①心身の発達を促すことを目的とした親子触れ合い遊び
- ②家庭生活の中で手軽にできる親子の触れ合い遊び
- ③家庭生活の中ではできない親子の集団触れ合い遊び
- ④子ども同士のかかわりを促すことを目的とした触れ合い遊び⑤その他

5-2 結果

「1) 触れ合い遊びについて興味がありますか」の問いには、全ての方が「とても興味がある」と回答された。また、「2) 本日、触れ合い遊びを体験していただきましたが、いかがでしたか？」との問いにも、全ての方が「とても楽しかった」と回答された。子育て支援講座におけるニーズ把握調査においても、「触れ合い遊び」のニーズは高いことから、子育て家庭における触れ合い遊びへの関心の高さがうかがえる。

「3) 触れ合い遊びを通して子育て支援として、求める活動内容を一つお選び下さい。」については、「①心身の発達を促すことを目的とした親子触れ合い遊び」が11名（44%）「②家庭生活の中で手軽にできる親子の触れ合い遊び」8名（32%）「③家庭生活の中ではできない親子の集団触れ合い遊び」5名（20%）「④子ども同士のかかわりを促すことを目的とした触れ合い遊び」1名（4%）「⑤その他」0名（0%）となった。触れ合い遊びの需要は把握しているものの、具体的な内容までは把握できていなかったため、今回の結果は大変興味深いものであった。筆者らの苦慮から始まったこの課題について、今後調査を進め、ニーズに合った講座の実施につなげていきたいと考える。

6. まとめと考察

今回は、現在鹿児島市内で行われている子育て支援講座と子育て支援講座におけるニーズ把握において、最も高かった「触れ合い遊び」の実践について明らかにした。そ

の中では、躍動感溢れる子どもたちの姿や子どもの反応をみながら遊びを工夫する親の姿が多く見られた。当初筆者は子どもの心身の育ちを期待してこの活動を行ったため、親が子に、また子が親に互いに配慮しながら能動的に関わる場面は印象的であった。親の関心度及び感想においても「とても興味がある」「とても楽しかった」との回答である。今回の実践を通して、触れ合い遊びは直接触れ合う身体のコミュニケーションを伴うことにより、親と子のかかわりの双方向性が生まれやすい遊びであることが分かった。このことより、触れ合い遊びは親子を支援する活動としてふさわしい活動であることが示唆される。触れ合い遊びを通した子育て支援として、求める活動内容については、触れ合い遊びの需要は把握しているものの、具体的な活動内容までは把握できていなかったため、今回の結果は興味深いものであった。

今後も調査を進め、自らの実践を振り返りながら、よりよい子育て支援のあり方について検討していきたいと考える。

引用文献

- 1) 中村礼香、丸田愛子：鹿児島県における音楽を通した子育て支援から見える課題、南九州地域科学研究所所報、N0.31、pp.23-32、2015
- 2) 厚生労働省：保育所保育指針＜平成20年告示＞
- 3) 文部科学省：幼稚園教育要領＜平成20年告示＞

参考文献

- 4) 鹿児島県：鹿児島県子ども・子育て支援事業支援計画 <https://www.pref.kagoshima.jp/ab14/kenko-fukushi/kodomo/shinseido/jigyoukeikaku.html>
- 5) 鹿児島市：子ども・子育て支援事業計画（平成27年度～31年度）<http://www.city.kagoshima.lg.jp/kenkofukushi/kosodate/kosodate/kosodate/sedo-kekaku/shien/index.html>
- 6) 伊藤克実小橋明子常見裕子小橋拓真：『幼児の生活と子育て意識調査-就学前の保育園児の遊びと生活、親の子育て意識の実態』札幌大谷大学札幌大谷大学短期大学部紀要（44）、pp.111-134、2014
- 7) 内閣府：『平成25年度「家族と地域における子育てに関する意識調査」報告書 全体版』pp.65-96
- 8) 遠藤晶、松山由美子、内藤 真希：『対話的な手法によるふれあい遊びの実践—幼稚園 2 歳児クラスの表現遊びを通して—』武庫川女子大紀要（人文・社会科学）pp.21-29（2011）

（平成28年1月20日 受理）